

蔵王高校クラブ・ジオパーク活動 ～蔵王町と共に歩む協働的な防災の学び～



宮城県蔵王町 蔵王高等学校
防災主任 伊藤 伸

1 はじめに

宮城県蔵王高等学校は、蔵王町に所在する唯一の県立高校です。本校は、「令和の日本型学校教育」の実現を目指し、個別最適の学び（ユニバーサルデザインへの配慮等）と協働的な学び（地域と連携した学習）の2つの学びの充実に取り組んでいます。令和3年度からは、協働的な学びの一環としてクラブ・ジオパーク活動を開始しました。蔵王町のジオパーク構想と連携し、全生徒・教職員がクラブ・ジオパークメンバーとして防災、観光、福祉、教育等の様々な分野の学習を行い、地域と学校が関わり合う学びを実践しています。特に本校の防災教育（P S F = Project Shoulder the Future）は、災害への理解を深め、地域防災の担い手となる人間の育成を目指し様々な取組を実践しています。

2 蔵王高校の防災教育（P S F）

近年、蔵王町をはじめ県南地区では少子高齢化の進展と小中高の生徒数の減少が見られます。この現状において本校が目指すべき姿は、有事の際に地域住民が頼れる心の拠り所となることです。また防災教育を通じ、未来の地域社会に貢献できる共助の力を身につけた人間を育成し送り出すことです。これらの目指すべき姿を踏まえ、令和3年度より蔵王高校の防災教育をP S Fと冠することにしました。

3 火山災害への理解と備え

県内には栗駒山と蔵王山の2つの活火山が存在しており、本校では蔵王山の火山災害の被害が想定されます。県内で最も活火山に近い県立高校として、火山災害への理解と備えを万全にする必要があります。

令和3年6月、蔵王町防災係長に講師を依頼し火山災害講話を実施しました。ハザードマップの見方や本校に想定される融雪型火山泥流と火山灰について解説をいただきました。また同時に実施した火山災害防災訓練に対する指導と助言をいただきました。

また後日、本校の代表生徒、教職員、蔵王町防災係長とで河北新報社主催の防災ワークショップむすび塾に参加しました。噴火による避難を経験した助言者とZ O O Mで対談し、有珠山・三宅島・雲仙普賢岳の火山災害について質疑応答を行い、自分たちがなすべき備えについて考えを深めました。

これらの学習の成果は、生徒と教職員の火山災害への理解の深化と防災の当事者意識の涵養です。例えば訓練後の振り返りでは、「融雪型火山泥流の動画を見て、思った以上に流れが速く驚いた」「自分の住む町のハザードマップも確認した」等の生徒の変容が見られる記述がありました。またワークショップ後、「災害時の家族の役割分担を再確認する」「山麓に住む祖父母と火山災害について話した」等自分たちにも火山災害のリスクがあるという意識が芽生えた様子が見られました。



火山砂防フォーラムに向けてフィールドワークで学ぶ様子



火山災害講話でハザードマップの見方を学ぶ生徒の様子

4 共助の力を育む避難所学習

生徒には折に触れて「自分の命を守る自助の力に加え、誰かのために行動できる共助の力を身につけてほしい」と伝えていきます。共助の力の育成のため、本校では避難所学習を取り入れています。

令和3年8月、避難所の紙上シュミレーションを実施しました。実際の校舎図を活用し、グループごとに計100名を振り分けました。振り返りでは、それぞれの割り振りの優先順位の違い、高校生の自分たちからできる役割等の気づきを共有しました。

令和4年6月、県民防災の日に合わせた全校P S Fでは全校生徒と教職員でH U Gを実施しました。教職員はサポート役で、生徒主体でH U Gに取り組みせ、普段は交流の少ない他学年との協力の機会を作りだしました。

今年度の冬には、昨年度中止となった避難所設営訓練を実施予定です。本校が主催し地域住民や近隣中学生も合同で実施予定のため、さらなる生徒の主体的行動に期待しています。

5 今後の活動

クラブ・ジオパーク活動は、地域防災・地域協働・地域発信の三本柱から成っています。本校の地域防災や地域協働の諸活動



防災ワークショップむすび塾の様子

は地域からもご評価いただき、蔵王町の世界ジオパーク構想推進の一助となる地域貢献の役割も果たしています。世界ジオパークの認定が叶えば、日本全国にさらには世界に誇れるジオパークとなり、生徒にとってその麓の高校にいたことは誇りになると考えています。

今後は、これまでの活動を継続しつつ、地域発信の活動の幅を増やしていく必要があると考えます。その一環として、本校は今年度蔵王町で開催される火山砂防フォーラムに参加予定です。火山の危険性だけでなく恵みも知り、地域の魅力を発信することで、地域との協働的な学びをより一層充実させていきたいと思ひます。